

医療九条の会・北海道 会報 第7号

発行：2009年8月 発行責任者：猫塚 義夫

札幌市北区北14西3 1-12 TEL(011)758-4585 FAX(011)716-3927 9jyo@dominiren.gr.jp



市民講演会 命の水を求めて



ペシャワール会事務局長
福元 満治さん を迎えて

2009年6月11日(木)
札幌市・共済ホールにて

当初講演を予定していた中村哲医師が、現地の事情により帰国できなくなったために(中村先生からメッセージが寄せられました)、急遽福元満治さん(ペシャワール会事務局長 石風社代表)に講演をお願いすることになりました。

中村哲医師が講演をする予定でしたが、どうしても現地の事情で帰国が叶いませんでした。心よりおわび申し上げます。中村医師からビデオレターによる現地の報告と、手紙でのメッセージを読み上げて紹介します。

中村哲医師が帰国できなかった理由

現地の事業は非常にうまくいっています。昨年8月26日に私たちの仲間、伊藤君が殺害された事件がありました。その後、中村ひとり残り、現地の700人と共に作業を続けています。日本人の職員が居ないと現地の士気が緩むのではないかと心配していましたが、この事業は現地の人たちにとって死活問題なので「ここで放棄

もくじ

市民講演会 「命の水を求めて」	1
九条の会講演会 「加藤周一さんの志を受け ついて」に参加して	7
プルサーマル問題	9

会場に集まれたみなさん、主催者の方々へ 帰国延期でご迷惑をおかけします。

本日、やむを得ざる事情にて出席できないこととお詫びいたします。

6年を過ぎた水路建設は、今年5月末に主要工事を終え、全長24 kmを開通する予定でありました。

しかし、4月から5月にかけて予期せぬ集中豪雨に度々襲われ、そのうえ行政や軍閥・米軍との折衝が難航、工期が1ヶ月延長を余儀なくされました。

それでも、ガンベリ砂漠横断ルートは3.8 kmのうち、約3 kmを完成、試験農場に達しました。岩盤周りの難工事1 km区間は2週間で全工事を完成、ガンベリ砂漠に第一弾の灌漑が開始されます。

アフガン情勢は、隣国パキスタン・北西辺境州と同様、政情は厳しさを増しております。「今中断すると、完成の機会を数年待たなければならないだろう。財政上の損失だけでなく、続々と帰農した15万人以上の人々に大きな影響が避けられない」との判断です。

そこで、職員・作業員、計700名は、現在摂氏48度の酷暑と砂嵐をおして、ほとんど自発的に必死の作業が続けられています。一作業員から重機の運転手、指導的な職員にいたるまで、これほどの画期は今までなかったことです。当方もその熱意を汲み、全力で取り組んでいます。しかし、手抜きは許されません。ここは工期が多少延期されても、何百年でも過酷な自然に耐えうるしっかりしたものを完成すべきです。

以上のような理由で、帰国を延期せざるを得ませんでした。事情ご理解のうえ、ご海容いただきますよう、お願いいたします。

2009年6月6日

アフガニスタン、ジャララバードにて
中村哲

してはならない」と、以前よりも責任を持って積極的に仕事をしていました。現在、全部で4か所、24キロの大きい工事を行っています。中村は医師ですが、ここ6年間は重機のハンドルを握っています。これまで、私たちが目を離すとサボる現地の作業員がいたのですが、昨年1月に私が行って見たら、皆必至の思いで作業し、サボっている人は一人も居ませんでした。

お陰さまで24キロの工事はもう、完成目前です（工事は、7月に無事終了しました）。砂漠化していた3000ヘクタール余りが、すでに農地として回復しています。

現地の政情が今後不安定になり混乱することが予想されているので、完成の目途をつけて帰国することにしました。帰国が延期になり、申し訳ありませんでした。改めて中村を呼んでく

だされば、現地のお話しをさせていただけるのではないかと思います。

中村は自分自身のことをなかなか語らないこともありますので、今回は私とその背景も含めてお話ししたいと思います。

25年に及ぶペシャワール会の活動

私どもは1984年の春からパキスタン北西辺境州のペシャワールで、中村医師がハンセン病治療の責任者として赴任したところから始まりました。北西辺境州は、現在かなりの内乱状態になっており、たくさんの方々の方が亡くなっています。「911」事件以降、アメリカはこの地

パキスタン北西辺境州及び アフガニスタン国内事業全体図



域をテロリストの巣窟として攻撃を続けています。「反政府組織を攻撃する」とアメリカは言っていますが、結局は民間人・非戦闘員を殺戮しています。アメリカから莫大な資金援助を受けているパキスタン政府も共に北西辺境州を制圧しようとしていますが、現状は反政府組織がこの地域をほぼ制圧しています。

カシミールやパレスチナなど、いま世界中で様々な紛争が起こっていますが、歴史をふり返ってみますと、大半がかつての帝国の植民地政策の後遺症が残っている。ここもそういう地域です。

私たちはペシャワールに基地病院をひとつ、パキスタンの山岳部に2か所、アフガニスタンの山岳部に3か所、首都のカブールに臨時診療所5か所をもって活動していました。ただ、私たちの病院に来ることができる人たちはまだ恵まれている方です。アフガニスタンの大部分は山間部なので、山奥からバスが通っている道に出るまで歩いて1週間かかることがざらです。私たちは特にハンセン病患者を見つけるため狭い山岳路を馬に乗って移動診療をしていました。3000メートル程の高地にある電話もない小さな村に臨時的診療所をつくると、ロバや馬に

乗った村人たちが村中に医師が来た事を伝えてくれて、半日もすると200人ほどが集まります。生まれてはじめて医師を見るという人たちも集まってくるわけです。マラリアやアメーバ赤痢など、熱帯性の感染症が非常に多いです。

文化を自分たちの尺度で測らない

イスラムでは、男女の隔離が風習としてあります。女性は子どもと老人を除く、ブルカと呼ばれる布をかぶり、顔を見せないようにしています。アメリカ軍は攻撃を正当化するために、このブルカを女性抑圧の象徴のように語っています。「タリバンが女性を抑圧するためにブルカをかぶせている」とメディアで流されました。しかし、これは一言でいえば、「伝統的な外出着」に過ぎません。文化というのは土地固有のものであって、それを外部の人間が自分たちの尺度ではかり優劣を言うべきではないのです。ひとつは、「女性はみだりに男性に対し肌を見せてはならない」という宗教的な戒律があります。また、女性を略奪されないように守り、熱い太陽熱から肌を守るためにかぶっています。でもこれを被ってみたら足元が見えにくかったので、近い将来スカーフなど変わっていくかもしれません。タリバンの実効支配が及んでいなかった地域でも女性はブルカを被っているのです。決してタリバンが強要したものではありません。これは文化であり、優劣の差ではありません。日本の冠婚葬祭を世界のグローバルスタンダードにしようなどと思う人が居ないのと同様、自分たちの尺度で文化を見るべきではないと思います。

私たちは、一番多いときには年間40万人近い患者さんたちを無料で診察していました。しかし、病院近くの元気な患者さんが病院を占領し、遠方の患者さんが受診できないことや、中には市場で売る為に薬をもらっていた人が出てきましたので、防止のために初診料をもらうことにしました。もちろん、ハンディキャップのある方やハンセン病、極貧困層の方などは長期入院を含めて無料にしていました。無料にする

と美しいことのように感じますが、そういった問題が起こるといことを我々は学びました。

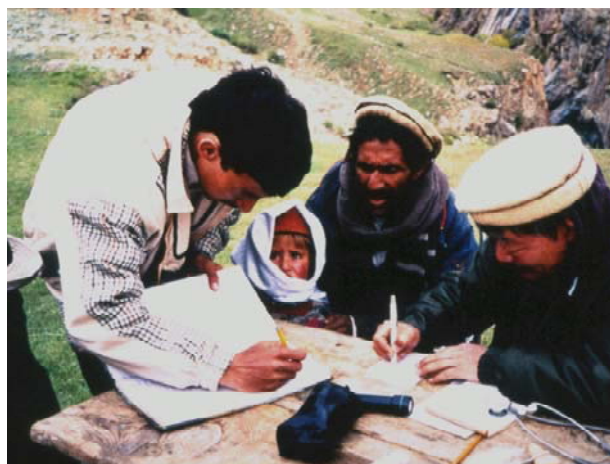
NGO保護に自衛隊は必要か

2001年に「911」事件があり、報復として米軍はその年の11月7日にアフガニスタン空爆を開始しました。毎年空爆は多くなっています。今年は昨年より爆撃の頻度が3割増えたと報道されています。避難民が大勢出るということで、パキスタン側に世界中からNGOがやってきました。日本からもやってきました。その時に国会で「NGOを保護するために自衛隊を派遣すべきかどうか」という議論がありました。そのとき中村医師が参考人として国会に呼ばれ意見を求められました。中村医師は、「必要なのは爆弾ではなく、水と食料。パキスタンは独立国家で軍隊も警察もあるので、外国のNGOの安全は保障されている。そこに実戦経験もない自衛隊が行っても混乱するだけである。自衛隊の派兵は有害無益である」と言いました。それに対して一番激しい野次を飛ばしていた代議士が、鈴木宗男さんでした。そのあと国会議員のみなさんと一緒に弁当を食べました。鈴木さんは中村医師にひとこと、「先生、心配しなくてもいいです。自衛隊はパキスタンには上陸させませんから」と言いました。実はそのときの日本政府の目的はインド洋における米軍の後方支援であり、パキスタンに自衛隊を上陸させる意図は日本政府にありませんでした。「NGOを保護する」という人道支援であれば、海外に自衛隊を派遣することが国民に納得させられるのではないかと政府は考えていたわけです。今回、我々は「海賊退治目的」ということにまんまと騙されて、自衛隊派兵をすんなり通ってしまいました。

9条に守られているという実感

憲法9条の問題を話すと、「隣で核実験やミサイルを飛ばすような国があるのに、憲法9条を

言うのは空理空論、理想論にすぎない」という人がいますが、私たちが支援している現地から見ると、我々の活動は憲法9条によって確実に守られているという実感を持っています。アフガニスタンもパキスタンも、そしてロシア周辺の国々も日本に対してかなりの親近感をもっていました。その理由は日露戦争に日本が負けなかったことに敬意を持っていることと、広島・長崎の惨禍を皆知っていて、そこから復興し、経済大国になったこと、そして、それなのに日本はこれまで一切軍事的な介入をしてこなかった。これに対する敬意を持っていた。これについては誤解があり、日本は朝鮮戦争とベトナム戦争の特需で経済復興していますから、一切軍事介入をしていないとは言えないのですが、とりあえず日本の自衛隊を国外に出さなかった。だから私たちは、湾岸戦争が始まる前までは、車両に日の丸をつけて活動していました。これをつけていると安全保障になっていたわけです。ところが、湾岸戦争以降、インド洋の後方支援、イラク派兵がされると「日本は米国の同盟軍」ということが知れわたってしまい、弾よけだった日の丸が、的に変わってしまいました。今では車両の日の丸を外さざるをえません。私たちが9条によって確実に守られています。戦争を経験した人たちの教訓、あるいは世界中の人々共同の望みですので、こればかりは絶対に死守しなければならないと思っています。



押しつけではなく

私たちが村に診療所を建てるときは、必ず村

の人たちに説明をします。北欧の団体がある村にきれいな診療所を建設したのですが、きちんとした説明がされない為に村人たちに受け入れられず、撤退しました。突然近代的な病院を村に建てて予防接種を呼びかけても、警戒されてしまい、「あの薬を飲んだら子どもが生まれなくなる」などの良からぬ噂が流されます。

私たちが教育した村の青年たちを仲介して「ジルガ」という長老や部族長たちでつくられた村の議会で協議してもらい、診療所が必要と話し合われたら、土地を提供してもらい建設するという手続きを踏んで我々は医療活動を行うということで、10年以上も活動を維持することができます。こちら側で勝手に病院を建てても、押しつけに感じられてしまいます。

水こそ人間の源



アフガニスタンは79年のソビエト軍による介入以来、戦争と内乱が続いています。戦争は人災ですが、2000年からは人災だけでなく、干ばつという天災にも見舞われてしまいました。2000年ごろ、私たちの病院には次々に子どもたちが担ぎ込まれてきました。しかもみんな

簡単な下痢症で亡くなっていきました。調べてみたら、井戸が枯れ、汚い水を飲んでいることが分かりました。飢饉で栄養失調になり、ちょっとした下痢でも死んでいきました。WHOの調査でも中国西部からイラクにかけての干ばつで、大勢の死者が出ていることが明らかになりました。

干ばつから逃れるため、多くの人々が土地を離れ難民になりました。マスメディアは「タリバンの圧政から逃れた難民」と言っていますが、大半は干ばつによる難民です。

中村医師は医療活動だけではなく、井戸掘りを始めました。最初は業者を呼んでボウリングによる井戸掘りを考えましたが、資金難と機材を運ぶ困難、井戸が枯れたときにどうしようもなくなるということで、手掘りで井戸を作ることになりました。村の人たちに日当を払うので失業対策になり、技術を伝えることができます。井戸が枯れても村人たちで掘ることができます。

井戸を掘り水路を整備すると、半年ほどで枯れた大地が緑が蘇りました。いかに水が土地の基本、人間の源であるかを私たちが実感しました。

NGOが開設している病院では、下痢の患者が来ると抗生剤を渡します。しかし、いくら薬をばらまいても、水そのものが汚れている限り悪循環は断ち切れません。飢えと渇きは、薬で癒すことができません。

私たちは必ず現場に行って活動します。欧米の人たちは農民とテロリストの区別がつかないので、現場に行かないように指示されている場合が多く、行ったとしても車から降りない。現場の臭いが染み付いています。

用水路工事は、江戸時代に完成した伝統的な工法を用いました。アフガニスタンの家は泥と石で作られているので、みんな石工の技術は持っています。針金の大きな蛇籠に石を詰めて両岸に置き、その上に土のうを積んで柳を植えました、この工法であれば現地の人たちが修復できますし、針金が腐れても柳の根が石を抱き込み、岸を守るわけです。中村医師はメスの代わりに重機を操縦し、大地を手術しているわけです。

志を深く

日本から青年が40～50人も来ています。最初は英語もできない若者たちが現地で3カ月も過ごすと、ちゃんと現地語をマスターするようになるのです。武装グループの凶弾によって殺された伊藤和也君は、あのような殺され方をしたものですから、非常に高潔で志が高いように言われていますが、私は彼の志が「高い」とは思いません。「海外協力」を振りかざしたこと



がない彼は、志が「深い」青年でありました。志の高い人ほど挫折するものです。

よく、先進国がアフガニスタンなどを援助するときに、我々が理想とする社会の青写真を描いて、「民主主義」を持ち込んだり「男女平等」

を呼びかけたり、学校を建て文具を配るなどします。それは非常に重要なことではありますが、現地の住民が食っていくことができない限り、子どもたちが教育を受ける環境はできないのです。私たちは相手を無理やり手術するのではなく、自然治癒力を高めることが大事です。アフガニスタンはもともと農業立国でありました。彼らの文化や風習を守る気持ちを大切にしながら、治水し農業の場を確保することを、私たちはやってきました。

世界には二通りの人間がいる

「911」の後、私たちはパキスタンに移動した際、中村医師は現地の長老に必ず戻ってくると告げました。そのときに長老は、「世界には二通りの人間がいる。ひとつは無欲に他人の事を思う人たち。もうひとつは、自分の利益のみを謀って心の曇った人たちだ。あなた方日本人がどちらであるか、お判りでしょう。私たちは決して日本人を忘れません」という言葉を返してくれました。私たちはそんなに美しい人間とは思いませんが、いつもどちらの人間なのかを問いながら活動をしています。



Quala-e-Zaman Khan Clinic

「九条の会講演会—加藤周一さんの志を受けついで」に参加して

旭町医院 堀元 進

今年6月2日、東京日比谷公会堂に於いて、昨年、死去した加藤周一さんを偲ぶ「九条の会講演会」—加藤周一さんの志を受けついで—が開かれた。

会場のある日比谷公園は昨年末から今年正月にかけて「年越し派遣村」でマスコミにも大きく取り上げられ、一躍全国的に有名になった所である。昨秋からの世界的規模の大不況（本来は恐慌と呼ぶべきである）によって企業が派遣社員を中心とした大規模なリストラを行い、多くの労働者が職場を失い、住む場所を失った。企業の論理が大手を振って横行した結果である。戦後、この様な露骨な労使関係はわが国では過去には無い。日本という国は、労使の立場を超えて人間を大切にする文化風土を持つ国であった。あまりの現実の過酷さに、心有る有志が立ち上がる。ボランティアが集まって、多くの人に呼びかけて、行く場所を失った労働者の為に、とりあえず寒さをしのぎ飢えをしのぐ場所を提供した所である。多数のテントがはられ、ボランティアによる炊き出しが行われた年越し派遣村。道路一本はさんだ向かい側には帝国ホテルがそびえている。横は日生劇場と東京宝塚。先進国として、今や世界経済の重要な一端を担う日本という国の決して一様ではない現実の一側面を垣間見る風景。日比谷公会堂はその日比谷公園の中にある、レンガ造りの重厚な歴史的建造物である。平日の午後6時半開会の講演会。会場の収容能力の関係で入場には事前の受付が必要であった。が実際は、5月中旬にはその参加申し込み数は定員に達しており、その後は入場券を手に入れる事も出来ない状況となっている。九条の会立ち上げの中心人物であった加藤周一さんは昨年胃癌で死去。我々は日本の最高の知識人を失っている。

講演会は彼を偲び、その志を学び、今後我々

がいかにその精神を受け継いでゆくべきか、をテーマに開催された。講演者は作家の井上ひさし、大江健三郎、澤地久枝、憲法学者である奥平康弘の四氏。そうそうたる顔ぶれである。入場締め切りとはなっているも開催日の数日前には事務局に入場希望の再問合せが殺到。事務局は当日のキャンセル状況を見て、空席分だけの入場を可能にするキャンセル待ち受けつけの設置を発表した。6月2日午後4時30分、開会の2時間前には日比谷公会堂入口の階段横には300人を超える人が集まり、空席待ち番号が記された紙が配布されるのを受け取り、事態の推移を見守っていた。会場の周囲は右翼の街宣者が大音量で「九条粉碎」を叫び、車を移動させながら自分達の主張を声高にアピールしている。あたりはそのスピーカーが作り出す荒々しく、それ故に心わびしい空虚な騒々しさと、冷静で物静かな普通の人々である参加者、参加希望者が作り出す穏やかで友好的な人間の香りが入り混じった独特の風景を作り出していた。

何故、人々は九条の会に集うのか。収容能力を超えて入場出来そうもない会場へと足を運ぶのか。多分、それは各人それぞれの人生から湧き上がる泉の様なある種の「思い」なのではあるまいか。キャンセル待ちの列の中には先の大戦を経験したであろう年輩の方も多く見受けられる。手にした番号の行く方を御夫婦で、或いはおひとりで静かに待っている。人はそれぞれの時代の中で自分の人生を生きている。そのたった一度の人生の中で自分が自分なりにその道を歩む時、社会の有り様、国家の有り様が見えてくる。より人間らしく生きる事が出来る時代、より正しい社会の実現への希求が年を重ねる毎に確たる信念となって沸いて来るのであろう。そこに集う人に共通するもの、それは恐らく人類の文明が作り出した大きな負の遺産である戦

争を忌避し、平和の内にまともな人間らしい暮らしを送り、人間として当たり前の幸福を享受する願いなのである。

午後6時半、講演開始。井上ひさし氏、加藤先生との年齢の違いを超えた共通の思い、大江健三郎氏、本当の知性の豊かさとその目指すもの。奥平康弘氏、法を知る学者として今の為政者の破壊的な政治手法とその無知、破廉恥さ、が語られる。会場の外に並んだキャンセル待ちの方々、主催者が消防法を厳守したならば半数も入場出来なかったに違いない。今、この講演会の開催の意味は何か。今、日本の置かれた状況は如何なるものか。我々が立ち向かうべき危機は何処に存するか。主催者の英断、全員の

入場。会場は人間の「思い」に充たされる。通路にも人が溢れる熱気である。最後の演者の澤地久枝氏、間違った事は命がけで正す、若い人が希望を持って生きられる社会にする為に、国民の命をこれほどまでに粗末にする自民党政治を何が何でも今度の選挙で倒しましょう。万雷の拍手が鳴り止まない。人間の良心の叫びである。

加藤周一、彼が残した本物の知性は、心ある多くの人々の心の中に確実に生きている。平和の価値を熟知した明日への確かな道しるべが、公園の微風にそよぐ木々の葉間を静かに通り抜けて行った夜である。

九条の会講演会

——加藤周一さんの志を受けついで

2009年6月2日(火) 開会午後6時30分(開場5時30分)
日比谷公会堂(東京都千代田区日比谷公園内)

講演：井上ひさし 作家
大江健三郎 作家
奥平康弘 憲法研究者
澤地久枝 作家 (3月25日現在)
加藤さんのパートナーの矢島翠さんも出席されます。

うた：「さくら横ちょう」(詩・加藤周一 作曲・別宮貞雄)
ソプラノ 大橋ゆり ピアノ 村上弦一郎(桐朋学園大学教授)

九条の会は2009年6月10日に発足5周年をむかえます。
「改革」のくわだてを阻むため、一人ひとりができる、あらゆる努力を」と訴えたアピールは、多くの方に支持され、急速に広がりました。
全国各地の7000を超える九条の会は、世論の形成に大きな役割を果たし、今後いっそうの発展が期待されています。
そうしたなかで、残念なことに昨年12月5日に、加藤周一さんが亡くなりました。
発足からいつも前向きな発言で九条の会の牽引車であった加藤さんは、惜しみない愛情と大きな期待を次世代に抱いて、思考と感性の回路を開きつづけて決してありませんでした。
加藤さんの志を次の世代につなぐために、講演会を開催します。

手話通訳あります
全席自由席

前売券1000円
郵便振替で代金をご送金ください。
折り返し入場券をお送り致します。
加入者名・九条の会
口座番号00180-9-611526
通信欄に「入場券〇枚希望」とお書きください。

当日券1500円
入場は前売券優先の先着順とさせていただきます。
席に限りがありますので希望にそえない場合もあります。



地下鉄丸の内線、日比谷線、千代田線、三田線各駅出口より1-7分

主催：九条の会
<http://www.9-jo.jp/>
問い合わせ：九条の会事務局
電話03-3221-5075

プルサーマル問題について

勤医協ふしこ歯科診療所 遠藤 高弘

20年以上前に、資料済み燃料の再処理施設や増殖炉の危険性・恐ろしさを警告する本を読んで心に深く記憶していた。死の灰を濃硫酸で溶かしたプルトニウムを抽出してゆく過程は、さながら地獄の釜のイメージで、まさに地獄の大王プルトニウムの出現である。

津軽海峡を越えたところ（六ヶ所村）で再処理を再開すると言う話を聞いていたが、恥ずかしながら少し悠長に見ていた。

北海道の泊3号機建設に反対する動きは数年前にあったが、今回あっさり北海道新聞で「プルサーマル計画推進します、安全性は確認されている」という（政府の見解そのまま垂れ流しのような）小さな報道を目にし、「えっ！」と驚いたのが今回の投稿に至ったきっかけである。急いでインターネットでプルサーマル計画を調べた。

現在までに事前合意が成立しているプルサーマル発電計画は・玄海原子力発電所3号機・伊方原子力発電所3号機・高浜原子力発電所3および4号機・浜岡原子力発電所4号機。事前協議中のプルサーマル発電計画は・泊発電所3号機...となっている。

もともと遡れば、日本の原子力計画において

・1972年長計で「ウラン資源の対外依存度を低くする」ために「使用済核燃料から再処理によって消費した以上のプルトニウムを生成するために、高速増殖炉を利用することを基本方針とし、2010年ころの実用化をめざす」「しかしそれまでのあいだ相当量のプルトニウム蓄積が予想され（中略）、核不拡散上の配慮などの観点から、熱中性子炉の燃料として利用する」とあります。

・1987年の原子力白書では「軽水炉によるプルトニウム利用（プルサーマル）については、MOX燃料の特性確認並びに加工および取り扱い経験の蓄積を目的とした、少数体規模

での実証計画（中略）を経て、本格利用に移行することとしている」

・1997年2月の閣議了解「当面の核燃料サイクルの推進について」それを受けて電力会社は2010年までにMOX利用を実施する計画をまとめる。その時点で北海道を含む全国16～18基の建設計画を発表。その背景には原子力産業会議副会長宅間正夫氏の説明にあるように高速増殖炉計画が遅れていること、新型転換炉からの撤退がある。この年日本は、IAEAに「余剰プルトニウムを持たないとの原則を堅持している」ことを文書で説明。

その後データ捏造事件、JOC臨界事故（99年）、トラブル隠し発覚（02年）などにより関西・東京電力の計画は白紙に。一方この間、各地の原発で使用済み燃料貯蔵施設が満杯に近づく。これを六ヶ所村再処理工場に運ぶ必要が必至となる。日本が保有する分離済みプルトニウムの量は04年末で43.1トン。

・2004年の原子力白書では、「余剰」プルトニウムという表現が消える。初代外務省原子力課長金子熊夫氏の主催する原子力産業関係者の見解。「在庫のプルトニウムはいずれ燃料として燃やされるので、使用目的は明確であり、余剰プルトニウムには該当しない。」これにはIPPNW日本支部事務総長の横道謙次郎 広島大学名誉教授も名を連ねている。

そして1972年の長計方針を必ず貫こうとしていることがわかる。

現在プルサーマル計画を推進しているトップは、もと新日鉄社長であり経団連会長であった今井敬氏なのですが、まったく路線を変える気がないのは、経済財政諮問会議がこの前、社会保障総額の毎年の抑制を来年度以降も変えないと答申を上げたのと同じで、いくら国民が反対の意志を表明してもまったく聞き入れる気がないということです。

さて、反核医師・歯科医師の会からサミットにむけて、要請項目が提出された。

岸信介著「岸信介回顧録」に書いてある原子力についての下りも、如実に物語っている。

「原子力技術はそれ自体、平和利用も兵器としての使用もともに可能である。どちらに用いるかは政策であり国家意志の問題である。日本は国家・国民の意思として原子力を兵器として利用しないことを決めているので、平和利用一本槍ではあるが、平和利用にせよその技術が進歩するにつれて、兵器としての可能性は自動的に高まってくる。日本は核兵器を持たないが、潜在的な可能性を高めることによって、軍縮や核実験禁止問題などについて、国際の場における発言力を強めることが出来る。」

洞爺湖サミットで二酸化炭素による地球温暖化防止に原子力発電の文字が入れられてから、最近の北電TVCMでは「プルサーマル計画はヨーロッパで数十年行われている確立した技術です」の垂れ流しである。私は大きく二つの問題があると思っている。

一つは環境に対して大変問題があることが全く隠されていて、冷却水の排水温度の問題と高レベル放射性廃棄物の問題である。ちなみに温度の上がった排水の量は、日本の河川が1年間に海に流れ込む量の3割と言われている。

また、再処理工場から出る中レベル廃棄物が発生する放射線は一万キュリーだが、高レベル放射性核廃棄物は炉からとりだして150日たっても1.5億キュリー、これがどれだけとてつもないレベルか。しかもエネルギーが高く、500年間は地下に処理できないで地上で管理ということが電力会社から実際に回答されている。

公式HPには、使用済みMOX燃料については当面の間原子力発電所で貯蔵、管理し、「国の定める基本方針に沿って処理していきます」としか書いていません。しかもガラス固化実験は今年も失敗しています。電力業界は戦前から財界や政治と密接に結びつく非民主的な企業です。これらが及ぼす危害の大きさは、時間軸でも地域的な広さでも今大問題になっているアスベストなどの比ではまったくくない。夕張が高レベル

放射線廃棄物処理場に手上げたということも聞いた。北海道は相変わらず常に「なんでも処理場」である。

最近本箱をひっくり返してみた。1985年発行の「原子力発電」日本科学者会議編から「平常運転時の環境問題」についてですが、「タービンを回した水蒸気は復水器に導かれて海水で冷却されますが、使う水の量は100万キロワット原発で毎秒約70トン(!)、排水温度は取水よりも夏期約七度、冬期は最高十九度ほど高くなります。この取排水は海産生物系につぎのような影響を与える可能性があります。(以下略)」

もう一つはコストの問題です。六ヶ所村の再処理施設は最初の建設予定費360億円、しかし2005年度ですでに2兆8000億円使われており、今後の後始末などは推計30～40兆円となっている。こういうことを国民には隠す。本当に許せない。

この大きな問題をどう分析整理して国民に知らせてゆくか？

この投稿はその試みの一つである。

お知らせ と お願い

講演会「命の水を求めて」DVDができました。

本号でご紹介しています、福元満治さんの講演および会場との質疑など2時間にわたる講演会を記録したDVDを作成しました。

1枚1,000円(送料込み)で、お分けしています。

(ご注文は、事務局まで)



(講演会には、会場いっぱいとなる650人の市民のみなさんに参加いただきました)

会費納入のお願い

年会費は、医師・歯科医師3,000円・その他の職種の方1,000円 となっています。

別紙に請求書をつけさせていただきました。

どうぞよろしくお願いいたします。

(今年度分まで納入いただいている方には、請求書はついておりません。行き違いなどありましたら、ご容赦下さい)

医療九条の会・北海道

事務局 札幌市北区北14西3 1-12
TEL (011) 758-4585
FAX (011) 716-3927
9jyo@dominiren.gr.jp